

マスロー心理学研究会 《第 94 回》 定例会発表資料

2019（令和元）年 9 月 21 日

担当：河野 憲一

- 【自主発表】

神道の「祝詞」を読む

神道の祝詞の解説については専門書に記載されているが、ネット上でも容易に閲覧できる。未だ不明な箇所も多々あるがここでは幾つかの説を参考のうえ新現代語訳と解釈を試みた。

1 「天津祝詞」現代語訳

天津祝詞

高天原に神留坐す 神魯岐神魯美の命以ちて 皇御祖神伊邪那岐命
筑紫の日向の橘の小戸の阿波岐原に 御禊祓ひ給ふ時に生坐る祓戸
の大神等 諸々の枉事罪穢を 祓賜へ清賜へと申す事の由を 天津
神国津神八百萬の神等共に 天の斑駒の耳振り立てて聞こし食せと
恐み恐みも白す

天上の神の世界におられる「カムロギ」と「カムロミ」の命を受けて皇室の祖先の伊邪那岐命が筑紫の日向の橘の小戸の阿波岐原で禊ぎ祓いをされたときに現れた祓戸の大神たちよ、人間のさまざまな罪、穢れ、厄災を祓い清めくださいますようお願い申しあげて、天の神、地の神、八百万の神々と共に、まだら模様のある天馬が耳を振り立てるようにしてお聞きくださいますよう、恐れ多くも申しあげます。

<註>

カムロギノ命…高御産霊神（たかみむすびのかみ）

カムロミノ命……神産霊神（かみむすびのかみ）

『古事記』「天地初発（てんちしょはつ）」によると、「天と地が初めてできた

時、高天原に天之御中主神が生まれた。次に高御産巢日神（カムロギノ命）、神産巢日神（カムロミノ命）が生まれた。この三柱の神は単独の神で姿はなくとも確かに存在する神であるとしている。

高天原の「高」は高低差を表す縦軸、「天」は空間、「原」は水平に広がる横軸を表し、高天原は神々の住む三次元空間を表しているといわれる。

2 「大祓詞」現代訳

大祓詞

高天原に神留り坐す 皇親神漏岐 神漏美の命以ちて 八百萬神等を神集へに集へ賜ひ 神議りに議り賜ひて 我が皇御孫命は 豊葦原水穂國を 安國と平らけく知ろし食せと 事依さし奉りき 此く依さし奉りし國中に 荒振る神等をば 神問はしに問はし賜ひ 神掃ひに掃ひ賜ひて 語問ひし磐根 樹根立 草の片葉をも語止めて

天上の神の世界におられる皇室の祖先「カムロギ」と「カムロミ」の命令を受けて多くの神たちが天の安の河原に集められ、幾度も議論が重ねられました。この結果、天照大神の孫の「ニニギノ命」が豊葦原瑞穂の国（日本）へ降臨し平和な国として統治するよう委任されました。

しかし、国内には恭順を示さない大国主命など荒々しい神々がいたので何度も説き伏せ、従わない場合には成敗していくと、岩石や樹木、雑草の葉っぱまでもが口を閉ざして従うようになり平穏になりました。

天の磐座放ち 天の八重雲を伊頭の千別きに千別きて 天降し依さし奉りき 此く依さし奉りし四方の國中と 大倭日高見國を安國と定め奉りて 下つ磐根に宮柱太敷き立て 高天原に千木高知りて 皇御孫命の瑞の御殿仕へ奉りて 天の御陰 日の御陰と隠り坐して 安國と平らけく知ろし食さむ國中に成り出でむ天の益人等が 過ち犯しけむ種種の罪事は 天つ罪 國つ罪 許許太久の罪出でむ

ニニギノ命は天上の御座を後にして従者と共に幾重にも折り重なった分厚い雲を激しい勢いで何度も掻き分けながら地上に降りてきました。

その子孫カムヤマトイワレビコは地上の世界を平穏に統治するために四方の国土の中心として太陽が高く輝く大和の国を都と定め、そこに地底の岩に太い柱を掘り立て、屋根の千木の先が高天の原に届くように雲を突き抜け高々と聳え立つ荘厳な宮殿を建立し、天の神の神力や天照大神の庇護を受けながら宮殿

に籠もって平和な国になるよう祈願をしていた。だが、その国土に生まれてくる人びとが犯す犯罪は自然破壊や人倫の規範を破るといった天上の罪や地上の罪などさまざまな罪穢れが取りとめなく現れてくるであろう。

此く出でば 天つ宮事以ちて 天つ金木を本打ち切り 末打ち断ちて
千座の置座に置き足らはして 天つ菅麻を本刈り断ち 末刈り
切りて 八針に取り辟きて 天つ祝詞の太祝詞事を宣れ

このように罪や穢れが現れたならば、天の国で執り行われる儀式にならない、神事の供え物として真榊の根元と末を切断したものを千ほどたくさんの台の上に並べ、清らかな菅の根元と末を刈り断ち、細かく裂いたものを祓え具として用いて、天の祓いの詞の太祝詞を奏上するようにいわれた。

此く宣らば 天つ神は天の磐門を押し披きて 天の八重雲を伊頭の
千別きに千別きて 聞こし食さむ 國つ神は高山の末 短山の末に
上り坐して 高山の伊褒理 短山の伊褒理を搔き別けて聞こし食さ
む 此く聞こし食してば 罪という罪は在らじと

このように奏上すれば、天の神は天の岩戸を押し開いて、空に幾重にも重なっている雲を激しく搔き分けて聞いてくださるであろう。地上の神は高い山や低い山の頂上に登られて、山々にたちこもっている濃霧を搔き分けてお聞きくださるであろう。このようにお聞きくださいましたら、一切の罪は無くなりませぬ。

科戸の風の天の八重雲を吹き放つ事の如く 朝の御霧 夕の御霧を
朝風 夕風の吹き拂う事の如く 大津邊に居る大船を 舳解き放ち
艫解き放ちて 大海原に押し放つ事の如く 彼方の繁木が本を 焼
鎌の敏鎌以ちて 打ち掃ふ事の如く 遺る罪は在らじと 祓へ給ひ
清め給ふ事を

それはあたかも海辺から吹く強風が天空で幾重にも重なっている雲を吹き飛ばしてしまうかのように、朝霧や夕霧を朝風や夕風が吹き飛ばしてしまうかのように、大きな港に停まっている大船の舳先や艫で繋ぎ止めている綱を解いて大海原へ押し放つかのように、見渡す限り繁茂している雑木の根元を焼きを入れた鋭い鎌で伐採し尽くしてしまうかのように、残っている罪は一切無くなり、祓い清められます。

高山の末 短山の末より 佐久那太理に落ち多岐つ 速川の瀬に坐す瀬織津比賣と言ふ神 大海原に持ち出でなむ 此く持ち出で往なば 荒潮の潮の八百道の潮の八百會に坐す速開都比賣と言う神 持ち加加呑みてむ

この祓われた罪を、高い山や低い山の頂から流れ落ちてくる急流の瀬に住んでいる「セオリツヒメ」と言う神様が大海原に持って出て行きます。

このように罪を大海に持って出て行くと、次には激しい潮流が幾重にもぶつかり合って大きな渦潮がいくつも生れるような荒海に住んでいる「ハヤアキツヒメ」と言う神がガブガブと飲み込みます。

此く加加呑みてば 氣吹戸に坐す氣吹戸主と言う神 根國 底國に氣吹き放ちてむ 此く氣吹き放ちてば 根國 底國に坐す速佐須良比賣と言う神 持ち佐須良ひ失ひてむ

このように飲み込んでしまったら、次に生命の息吹が発生するという息吹戸に住んでいる「イブキドヌシ」と言う神が、根の国・底の国というこの世の根源の世界（黄泉の国）まで激しく息を吹き放ちます。

このように息吹を放てば、根の国・底の国に住んでいる「ハヤサスラヒメ」と言う神が罪をすばやくどこか遙か彼方へ持ち去ってしますので罪はすっかり失われてしまいます。

此く佐須良ひ失ひてば 罪と言う罪は在らじと 祓へ給ひ清め給ふ事を 天つ神 國つ神 八百萬神等共に 聞こし食せと白す

このように罪を浄化してくださるならば、この世から一切の罪が消滅します。今ここに「祓え給え清め給え」と唱え申しあげてを天上の神、地上の神を始め八百万の神々がお聞きくださり、力を授けくださりますよう謹んでお願い申し上げます。

<註>

- (a) ニニギノミコトは天上界から高千穂に降臨した。この後、三代目の子孫にあたるカムヤマトイワレビコが兄イッセと共に「中つ国」を統治するのに便利な「大和」へ移ることを決める。だが、高千穂からの東征は容易で

はなく、途中にさまざまな襲撃に遭い兄イッセは死去した。イワレビコは紀伊の熊野村に上陸したが妖気に当てられ倒れた。そこに布都御魂（ふつのみたま）というタケミカズチの霊刀を持ったタカクジラが現れる。天上のアマテラスが子孫の危機を察知して寄越したのだ。他にも「天つ神」から遣わされた八咫鳥がイワレビコ一行を先導した。このように大和を拠点にして「中つ国」を治めようとするイワレビコには「天つ神」のご加護があった。中つ国とは地上の人間の世界であり、神の子孫が人間の世界での統治を始めたのだ。その最初がイワレビコ、つまり初代天皇の神武天皇である。

（『面白いほどよくわかる古事記』、16 頁）

(b) カムヤマトイワレビコは大和に宮殿（畝傍橿原宮）を構え、初代神武天皇として即位し、大和に強大な政権が築かれた。

この他の巨大神殿には、オオクニヌシが天つ神に国を譲る条件として、「天つ神の子孫と同様に立派で、千木が天に届くほど大きい宮がよい」と要求し、出雲大社が建てられた。（『面白いほどよくわかる古事記』、146 頁）

(c) 「天の御陰」とは天上界の神々の庇護の意である。「日」とは太陽神「天照大神」であり、「日の御陰」とは天照大神の加護を受けることである。「隠れ坐す」とは、宮殿に籠もり祈願することである。つまり、宮殿において天上の神々の加護を得て国の安寧を祈願することが統治をするということであった。神殿において国家の安寧祈願をすることが天皇の国務である。

(d) 「天の益人」とは、「天上の神」の子孫が降臨して統治する国土を「天の国」とし、そこに生まれる人々のことである。清らかな国土には増え続ける人々とともに罪穢れが生じてくることになる。

(e) 「天つ神」の庇護を受けながら統治をしていたのだが、そこにもさまざまな罪が生じることがあるという。神の子孫が人間の世界に降りてきたこの頃は、罪というものもスサノオノミコトの犯した罪などの天上界での罪や地上の人間の世界での罪などが混合していたろう。

(f) 「天つ金木」と「天つ菅麻」は、それぞれ祓いの儀式に用いる供え具と払え具である。「天つ金木」とは神聖な堅くて小さい木の意味であり、真榊の上下を切り去り、中間を小さく切ったものを数多く台に載せる。「天つ菅麻」は神聖なスゲを細かく裂いたものであり、手に持って身体の穢れなどを祓い清めることに用いる。

(g) 「伊褒理」は旧大祓詞では「伊穂理」と表記されていたが、「いぶり」のことであり、ここでは高い山や低い山々にかかった濃い霧や霞のことである。

(h) 「佐久那太理」は「真下垂り（まくなたり）」であり、水の流れに勢いのある溪流のことである。

(i) 天つ罪 高天原の物語として伝えられている罪

- 畔放 (あはなち) 田の畔を破壊すること
- 溝埋 (みぞうめ) 溝を埋めること
- 樋放 (ひはなち) 木で作った木の通路を破壊すること
- 頻種 (しきまき) 重ねて種を撒くこと
- 串刺 (くしぎし) 他の田に棒を挿して横領すること
- 生剥 (いきはぎ) 生きたままの馬を剥ぐこと
- 逆剥 (さかはぎ) 馬の皮を逆に剥ぐこと
- 尿戸 (くそへ) 汚いものを撒き散らすこと

(j) 国つ罪 地上の人間の罪

- 生膚断 (いきはだだち) 生きた人の肌に傷をつけること
- 死膚断 (しにはだたち) 死んだ人の肌に傷をつけること
- 白人 (しらひと) 肌の色が白くなる病気 (白はたけ)
- 胡久美 (こくみ) こぶのできること
- 己が母犯せる罪 (おのがははおかせるつみ) 実母を犯すこと
- 己が子犯せる罪 (おのがこおかせるつみ) 実子を犯すこと
- 母と子と犯せる罪 (ははとことおかせるつみ) 女を犯し、その子を犯す
- 子と母と犯せる罪 (ことははとおかせるつみ) 女を犯し、その母を犯す
- 畜犯せる罪 (けものおかせるつみ) 馬、牛、鳥、犬などの獣姦
- 昆虫の災い (はうむしのわざわい) 毒蛇やムカデに咬まれること
- 高津神の災い (たかつかみのわざわい) 落雷などの天災
- 高津鳥の災い (たかつとりのわざわい) 猛禽類による家屋損傷
- 畜仆し (けものたおし) 相手の家畜を殺すこと
- 蠱物為る罪 (まじものせるつみ) 家畜の屍体で他人を呪うこと

3 解釈

日本神話を参考にしながら、①「大祓詞」の構成、②般若心経と大祓詞の類似、③「大祓詞」の役割、④なぜ天照大神は天津神、大国主命は下位の国津神となったのか、⑤神や人間は、どのように生まれたのか？ ⑥究極の神はいるのか、⑦「大祓」の意義、⑧何のために「大祓詞」を奉じるのか、⑨命の起源、について解釈していきます。

①「大祓詞」の構成

<起>天孫降臨

ニニギノミコトが神の国から降臨されたのち、大和を都に定め国を平和に治められていた。

<承>罪の発生

国々ではさまざまな罪が生じるようになってくる。

<転>大祓

大祓の儀式の方法を述べ、天上から伝わる祝詞を唱えることを教示する。

罪はまるで朝夕に吹く風が霧を吹き飛ばすように、鎌で雑木をばっさり刈り取るようにして消えていく。

罪穢れは、瀬織津比賣、速開都比賣、氣吹戸主、速佐須良比賣という祓戸四柱の神々が消し去ってくれる。

<結>消滅宣誓

罪が消え、この大祓の儀式で罪を祓い清めてくださることを参集した人に、よく拝聴せよ、と宣り聞かせる。

『日本書紀』「天壤無窮（てんちむきゅう）の神勅」には「葦原の千五百秋（ちいほあき）の瑞穂の国は、わが子孫が王たるべき地であるから皇孫であるお前が治め、天地が終わるまで、お前の子孫に皇位を伝えてゆけ」と述べたとある。これを受けて天照大御神が孫の「邇邇芸命（ニニギノミコト）」を地上である芦原中国（あしはらのなかつくに）を統治させるため三種の神器とともに日向（ひむか）の高千穂の峰に降り立たせた。

ニニギノミコトが高千穂に降臨後しばらく経ち、三代目の子孫カムヤマトイワレビコは国を治めるために大和地方を目指した。討伐の苦難時には神の支援を得、その地で生じた罪穢れは天上の禊ぎの方法を用いて清められていくなど神々の武威をもって完全平定を宣言し、神武天皇となる。

「大祓詞」は、天孫降臨から大和朝廷が成立するまでの故事を述べることから始まり、そこに生じる人間の罪や穢れが「祓」を行うことでどのように神々が関与して消滅していくかが語られている。大祓の儀式に参集した人々と共に人間の犯した罪穢れが天皇の祖先である天の神々の力によって清められていくことを神々へ感謝するとともに天皇統治の正当性を確認するものである。

②般若心経と大祓詞の類似

	序	破	急
般若心経	煩惱・囚われの心	完全なる智慧の呪文を唱える。	我執を離れ、一切の苦から解放される。
大祓詞	罪・穢れ	天上の太祝詞を唱える。	清められ、新たな生命エネルギーになる。

般若心経では、人間のもつ煩惱や囚われの心が完全なる智慧（般若波羅密多）の呪文を唱えることにより我執を離れて一切の苦から解放され、涅槃の境地に達する。

神道の大祓詞では、人間の犯した罪や穢れが天上の神の唱える太祝詞を奏上することにより清められ、新たな生命エネルギーになる。

ともに「人間のもつ負の部分が権威ある力によって克服され、幸福になる」という構成になっている。これは大祓詞が般若心経に倣ったものと思われる。

6世紀なかばに仏事にならって神事の外形の整備がすすめられた。寺院をまねて神社がつくられ、仏像・仏画をまねて神像や神の肖像画が作られた。祝詞はもともとその時々を神に述べるものであったが、読経を模倣して定まった形に創作された。（武光、104～106頁）このため大祓詞と般若心経には構成の上で類似がみられる。

③「大祓詞」の役割

天皇の祖先である「天照大神」が「大国主命」の上位に立つことで天皇を権威づける。

日本神話では、大国主命が天照大神の子孫であるニギノミコトに地上の支配権を差し出す「国譲り」の物語が中心にある。これは地方豪族が皇室に従ういわれを物語っている。朝廷の全国支配を確立させるために「大国主命」などをまつる地方豪族の祭祀を朝廷の管理下に組み入れようとしたのだ。その一つが「大国主命」の上位に「天照大神」を創作して、日本の神話を整備していったことであった。

王家はもともと大物主神（オオクニヌシの別名）を奉っていたが、6世紀に中央集権化を志向したとき、自分たちと同列のオオクニヌシを奉る地方豪族の上位に立つために、オオクニヌシの上位に太陽神である天照大神がつけられた。

(武光、59 頁) このとき南方と交易した航海民が持ち込んだ太陽神にまつわる南方系の神話を日本神話に取り込んだ。

「天照大神」信仰の成立とともに神々の世界の「高天原」が構想された。天の神は地の神である地祇よりもはるかに上位とする 5 世紀末に朝鮮半島から日本に移住してきた渡来人の「天神地祇 (てんじんちぎ)」という儒教の知識によって、天津神と国津神の区別がつくられた。(武光、98 頁) こうして格の高い天津神は天空におり、格の低い国津神は山にいて人々の生活する集落を見下ろすとされるようになった。

④なぜ天照大神は天津神、大国主命は下位の国津神となったのか

『古事記』によると宇宙の誕生後に天之御中主神、高御産巢日神 (カムロギノ命)、次に神産巢日神 (カムロミノ命) が生まれた。三柱の神が誕生し、その後、男女が対となった神も生まれ、七代続き、この神代七代 (かみよななよ) の最後に生れた伊邪那岐神 (イザナキノカミ) と伊邪那美神 (イザナミノカミ) が人類の祖先とされる。

国生みを任された伊邪那岐と伊邪那美によって天沼矛 (あめのぬのぼこ) で混沌とした世界をかき混ぜ、淤能碁呂島 (おのごろじま) が生れ、そこで麻具波比 (マグワヒ) が行われ、大八島国を生む。さらに小さな島々が生れた。

その後、伊邪那岐の左目から天照大御神、鼻から須佐之男命が生れ、その須佐之男命の子孫「大国主神」が地上世界を支配することとなる。

イザナキの子には天照大神、月読尊、素戔嗚尊などがおり、それぞれに役割を与えたが、素戔嗚尊は海原を治める仕事に従事しなかったため追放された。このとき高天原の天照大神を訪れたが、そこでも乱暴狼藉を働き、天照大神を怒らして天の岩戸に籠もらしたとして地上に追放された。素戔嗚尊は穢れを清めた後、出雲の国に降り立ち国津神になった。そこで八岐大蛇を倒して救った奇稲田姫を妻に娶り、六世を経た子孫として大国主命が生まれた。このため天照大神は穢れのない清らかな天の神であるが、一方、大国主命は素戔嗚尊の血統をひくので格下とされたのです。

大国主命が天孫降臨に先立って国土をニニギノミコトに譲ったことは大和政権が出雲の上位にあることを象徴しており、天照大神の正統の後継者である天皇は各地でまつられた神を支配する立場にあることを主張し、天照大神をまつる天皇家の祭祀は皇室だけの行事ではなく、全国的な祭祀だとしました。(武光、115～117 頁) このように日本は、皇室の先祖が天津神であるとする事で皇室と国民とが一体となっていたのです。

だが、元々神道における神とは天地の根源にもとづく霊であり、全てのもの

の内部に霊が宿るとされてきていました。「八百万の神」とよばれるあらゆる神々を奉ることを「出雲的神観念」とすると、その神々の指導者が伊勢神宮の天照大神だとしたのが「大和的神観念」です。（武光、95頁）

☆参照 「スサノオノミコト」の表記例

古事記	日本書紀	出雲国風土記
建速須佐之男命	素戔男尊	神須佐能袁命
速須佐之男命	素戔鳴尊	須佐能乎命
須佐能男命	須佐乃袁尊	

日本神話には約 2600 年の歴史があり、口伝で伝えられてきました。漢字が伝来したのは約 1500 年前であり、さまざまな漢字が当てられてきた。このため、アマテラス、オオクニヌシノミコトなど多くの神々についても多様な表記と別名がある。

⑤神や人間は、どのように生まれたのか？

神は、混沌から葦の芽のように萌え出た。

人は、大地から草のように萌え出た。

キリスト教では、まず全知全能の唯一神が存在し、その神によって世界が造られていきました。神道の世界観では、天地の区別も明暗の区別も分からない混沌としたなかから葦の芽のように勢いよく萌え出た（種子から芽が出るように出現した）ものが最初の神「可美葦牙彦舅尊（うましあしかびひこじのみこと）」になった。この他、天御中主尊（あまのみなかぬしのみこと：天の中心となる神）、高皇産霊尊（たかみむすひのみこと）、神皇産霊尊（かみむすひのみこと）が現れ「造化三神」とされている。神は混沌から萌え出たのです。（武光、35頁）

では、人間はどのように生まれたのでしょうか。神が人間を創造したと語る神話は多い。だが、日本神話では人類創造について触れられていない。『古事記』において人間がはじめて出てくるのは、イザナキが黄泉の国の追っ手を払うために桃を投げた場面である。自分を助けてくれた桃に「同じように青人草（あおひとぐさ）」も助けてくれ」と語りかける。この「青人草」は人間のことであり、人間とは草のように萌え出でて生い茂る存在だったのだろう。（かみゆ歴史編集部、65頁）

人間を草のように捉えることは祓えの詞にも見られる。ト部吉田神道では「三種太祓（みくさのおおはらひ）」が『三種太祓之大事』という秘中之極秘伝として伝授されています。これによると「天津祓（あまつはらひ）」は天を祓い天

の気を降ろす秘呪であり、「国津祓（くにつはらひ）」は地を祓う神呪であり天の気を下した地上を祓い清める力がある。「蒼生祓（あをひとくさのはらひ）」は地上に住むすべての人々を祓い清める神呪であるとされている。ここでは人間のことを蒼生（あをひとくさ）としており、人間は大地より萌え出る草のように捉えられている。（古川、51～52 頁）植物がのびる自然の力が原形となり、天地万物は、それ自体が内包する勢い・力によって「おのずから」次々と成していったものとされる。（『倫理用語集』118 頁）

日の本に生まれ出でにし益人らは、神より出でて神になるなり

中西直方、江戸時代の外宮神職

（武光、198 頁）

日本に生まれた人びとは、神の世界から来て、神の世界へ帰っていく。混沌とした世界から生まれ来て、死後は混沌の世界へ還っていく。生命のないところから萌え出たものが神であり、生き物を生み出すことをつかさどるものが神である。古いかたちの神道では生命力を神格化したものが尊い神とされていた。

⑥究極の神はいるのか

「天つ神」の命を受けて地上に降り立ったイザナギ・イザナミは国を生もうとしたが、最初に生れた子は手足のない水蛭子であった。二人が「天つ神」にその理由を問うと、天つ神々が占いをして「女神が先に言葉を発したのがよくなかった。もう一度最初からやり直しなさい」と答えたという。だが、天の神々は、この占いで一体誰の意志を問われたのだろうか。

日本神話で最高神とされる天照大神でさえも決して絶対的な支配者のようには振舞っていない。ものごとを決定するときには天照大神自らが占いをしたり、他の神々と相談したり、また他の神に祈ることすらしている。では、最高神は一体誰の意志を問われたのでしょうか。日本神話では最高神以上の究極神は存在せず、天つ神の背後にはもう神々はいない。そうであれば天照大神は神々を生んだ混沌の世界へ向かって祈ったのであろうか。混沌の世界とは、あらゆるものの生成と消滅の根源であり、奥深い神秘の世界であり、この世界へと通じることができるゆえに天照大神は神聖な神であるとして祀られた。（『よくわかる倫理』112 頁）（『倫理用語集』118 頁）

⑦「大祓」の意義

「本来の姿を包み隠す」⇒「つつむ身」⇒「罪」

「気が枯れる」⇒「気枯れ」⇒「穢れ」

「気の甦り」⇒「気甦り」⇒「清め」

「張る霊」⇒「生命力でもある霊を張る」⇒「祓い」

人間はこの世に生を受けたときは無垢であるが、現世の世俗の生活の中で知らず知らずのうちにさまざまな罪穢れに染まっていく。嘘をつくこと、人を憎んだり、怒り、妬み、嫉みなど、これらが罪、穢れとなる。

「罪」とは神が生んだ素晴らしい人間本来の姿を包み隠してしまうようなものを「つつみ（包む身）」という。これでは身体中の気力や元気の元である「気」が衰えてくる。「気」は生命のエネルギーそのものであり、「気（霊）」などの生命力が枯れた状態であり、「穢れ」は我々を生かしている神の尊い「気」を枯らしてしまう「けがれ（気枯れ）」である。（葉室、16頁）

生命力が枯渇する（穢れ）は死につながるものとして忌み嫌われる。日本人は「清浄」を好み、神道では清らかで若々しい生命力を重んじる。穢れは全て我欲の表れにより生じるために祓う。祓い清めることで枯れた気を甦らせることができる。そして再び清らかな気持ちで活力溢れる生活を再開することができる。

神道は自然万物の根源に宇宙エネルギーを観る。「気」とはエネルギーであり、「清め」はエネルギーの再生である。清めの儀礼により、気の甦りが図れる。「はらひ」とは「張る霊」であり、神々や人の魂であり、生命力でもある「霊」を「張る（はる＝春）」こと、つまり大きくして強めていく、生み出していくという意味がある。（古川、10～12頁）「祓い」とは、魂魄の生命のけがれ（気枯れ）をあがなって清浄となり、新しい生命力を生み出す産霊（むすび）のわざである。

言霊は神や人の魂魄から生まれ、その発する神や人の魂魄が清らかであれば天津祝詞によって自他ともに祓い清められ、新しい生命力が生まれる。

天津祝詞を始めとする祝詞や祓詞を日々奏上することにより、自分の魂魄はもとより、宇宙（高天原）をも祓い清めることができるのが祝詞であり、祝詞奏上（言霊発射）である。（古川、15頁）

古代日本人は万物に神的な気を感じており、気が枯れる（穢れ）と元の気（元気）を取り戻すために、気が甦る（清める）ことをした。大祓詞は個人の祓いだけでなく、社会や天地の一切の罪、咎、穢れが祓われ、祈願が叶うという万能の究極の祝詞とされてきた。（古川、48頁）その根本は罪・穢れからの清め、祓いであり、他の一神教とは違い、教典も「スルナカレ」式の戒めもなく、清く明るい審美感が漂う。

⑧何のために「大祓詞」を奉じるのか

人間の能力を超えるものはすべて「かみ（上・神）」と考えた。ある地方では速く駆けるオオカミが犬神として、空飛ぶ鳥が神の使者とされた。人間だけではなく、雨や風、山、川、巨石、動物も靈魂を持っているとして自然神や人格神などあらゆるものが奉られることにより神になる。

神道は多神教的世界観に立脚しており、教祖の伝道・布教により端を発したのではなく、元来の日本民族が抱き続けてきた信仰生活が時代とともにさまざまな要素、形態を重ねながら風土的・文化的重層性を持って体系化されてきました。神道には教典も法典もなく、教えを述べたり、法で人間を縛ったりしない。神は人間以上の力を持つが、人々を威圧して支配することはない。神も人間も平等な価値を持つ靈魂とされた。

神道の供養神事は死者が極楽に行くことを祈る仏教の供養とは異なります。大祓詞は葬儀や供養の時に死者や祖先の霊を慰めるために奏上するものではありません。「自然の恵みに感謝して、自分が住む土地にあつまる多くの靈魂（神）をもてなしてまつる」（武光、20 頁）誰もが豊かに暮らせるように良い人間関係をつくるようにつとめる。神道では死者の霊は神となり、子孫を見守り、その繁栄をもたらす「産霊（むすひ）」の行為を助けるとされており、大祓詞を奉じるのは、神となった祖霊に感謝し、自分たちの繁栄を作りだしてもらうためなのです。（武光、198 頁、202 頁）

大祓詞では、これを奏上することにより、もはや一切の罪穢れが消滅し、穢れを祓い除けることが完結できるとする。このように大祓詞には生命の源である気の再生装置としての機能がある。このため、今後どんな時代、世相になろうとも、個人にどんな穢れが生じても、大祓詞を唱えることによって「穢れ」が祓い除かれ、再びリセットして生きていける。未来にどんな苦難があろうとも、清き心で立ち向かえることができる。

⑨命の起源

『古事記』「神代の巻」によれば、神代において天照大神の孫の邇邇芸命（ニニギノミコト）が高天原という天上界から中津国という地上界に降臨したが、そこは朝日夕日の輝く美しい高千穂の峰であった。邇邇芸命（ニニギノミコト）は、そこから麓の海岸へと行ったところで美しい木花開耶姫に出会い、その場で求婚したが、彼女は「私から何とも申し上げられません。父神の大山津見神が申し上げますでしょう」と答えた。その後、父神は木花開耶姫とその姉の磐長姫の二人を邇邇芸命（ニニギノミコト）の嫁に差し出した。ところが、イワナガヒメは

ひどい醜女だったので即刻、親元に送り返し、コノハナノサクヤビメだけ留め、彼女と結婚した。それを知ったオオヤマツミノカミは大きく恥じ入り、ニニギノミコトに呪詛の言葉を送りつけた。

よしや磐長姫は醜かったにしろ、彼女をめとられれば、邇邇芸命（ニニギノミコト）の御寿命は磐のように永久に不変でありましようものを。木花開耶姫をめとられた以上、命の御寿命は美しいが、木の花のようにもろくなりましように。

イワナガヒメには岩のように強固に続く永遠の命を、コノハナノサクヤビメには花のような栄華をそれぞれ願って差し上げたのに、イワナガヒメを返されたことで天つ神のような永遠の命はなくなるというのである。こうして命は限りあるものになり、永遠ではなくなった。だが、それは一方的に与えられたのではなく、選択の結果であり、我欲の現れが寿命を決めてしまったのだ。永久不変な生命を捨ててまで、美しいがやがては滅びるはずの限りある生命を選び取った。石のように永遠であっても冷たい無意味な人生を捨てて限りある短い麗しの人生を選んだということで、日本神話における人間の死は神への反逆に対する懲罰として与えられたものではなく、神との合意によって人間が自ら選んだものであるとされているのです。（岸根、190頁）

このことは「バナナ型神話」と呼ばれ、日本神話も他地域の影響を受けていると思われる。

創造神が空から地上へ石を降ろしたところ、人々は石は食べられないという理由で受けとらず、次に創造神はバナナを降ろし「永久に変質しない石を選んでいたら永遠の命を授けたのに、お前たちはバナナのような命になるだろう」といった。東南アジアを中心に広く見られる神話。（吉田、73頁）

<参考文献等>

- ・太田雅男編『釈迦の本ー永遠の覚者・仏陀の秘められた真実』学習研究社、1994年
- ・学研教育出版編『よくわかる倫理』学研、2013年、112頁
- ・かみゆ歴史編集部『マンガ 面白いほどよくわかる！古事記』西東社、2018年
- ・岸根卓郎『宇宙の意思』東洋経済新報社、1993年
- ・神保郁夫監修『マンガ 神道入門』サンマーク出版、2002年
- ・武光誠『日本人なら知っておきたい神道』河出書房新社、2004年
- ・濱井修監修、小寺聡編『倫理用語集』山川出版社、2016年

- ・葉室頼昭『大祓知恵のことば』春秋社、2016年
- ・古川陽明『古神道祝詞 CDブック』太玄社、2016年
- ・吉田敦彦監修『図解 眠れなくほど面白い古事記』日本文芸社、2019年
- ・寺川眞知夫、同志社女子大学名誉教授「記紀が描く国の始まり 天皇の肖像」産経新聞、2019年2月22日
- ・毛利正守、大阪市立大学名誉教授「記紀が描く国の始まり 天皇の肖像」産経新聞、2019年2月22日
- ・読売TV、そこまで言って委員会NP「今こそ考える『天皇とは何か?』」2019年2月10日放送

【討議資料】

- (1) 発表者の内容はいつも大作で、氏の日頃の思索・研究の幅広さ、奥深さを物語っている。心理学のみならず、哲学・思想・宗教などから「人間」「生き方」を探る意欲に頭が下がる。
- (2) 伊勢神宮などさまざまな神宮・神社で、神様のご神体のお移りがあるとき、箱を膜で覆い、お姿を見ることはできない。たぶんお姿そのものは誰も見ることはできないだろう。神様の「絵」や「字」で表されることはあるようだ。
- (3) 日本の神々は、そこかしこにおられるとされ、自然との結びつきが強い。一神教の神は、唯一の存在とされ、ここに大きな違いがある。また、神といえども何か「人間的」である。
- (4) 日本の神話は、東南アジアの神話と同じようなモノも多く、その例として「因幡の白ウサギ」をあげることができる、サメの代わりにワニとか、いくつかのモノが見られる。東南アジアからの影響が神話のみならず、習慣にも残っているようだ。
- (5) 神道の教義を勉強したことがないので、神社に見られる「鏡」がどういう意味であるのかわからないが、自分勝手な解釈として、今ある自分、そして周囲を写すことにより、その写った姿に「誠」「心に曇りがないか」などを問い直すことが示されているのではないか、と思っていた。